

1

聖書という神の言葉を記録した偉大な本があります。

この聖書は主にイスラエル民族の歴史の中で、神が語られた神の言葉の生ける歴史である旧約聖書と、旧約聖書で約束されたイエス・キリストについての言葉からなる新約聖書とで構成されています。

その旧約聖書の中で、ダビデという王がイスラエル王国を建て上げる過程の長い物語があります。実はこの物語の中で、神はダビデを通して、神が創造された人に対する思いをわたしたちに表しています。

ダビデは若いとき、サウルという王に仕えることになりましたが、他民族との戦いで大きな手柄を立てたために、サウル王に妬まれ、命をねらわれて逃亡の生活をするようになります。

しかし、ダビデはサウル王の息子であるヨナタンとは、互いに相手を自分の魂のように愛する関係を持っていました。

ヨナタンは自分の父から命をねらわれているダビデに対して、「あなたの慈愛をわたしの家から永久に断ち切らないでください」と言い、彼と契約を交わしました。

長い期間の後、サウル王は戦争で死に、ヨナタンも死にました。

その知らせがサウルの家へ届いた時の騒動でヨナタンの子に事故が起こりました。

2

聖書のサムエル記下第4章中の言葉です。

- 4 サウルの子ヨナタンに、足の不自由な子がいた。サウルとヨナタンの知らせがエズレルから来たとき、彼は五歳であった。彼の乳母が彼を取り上げて逃げた。彼女が急いで逃げたので、彼は落ちて足が不自由になった。彼の名はメピボセテであった。

サウルとヨナタンは死にましたが、サウルの家に残った者たちとダビデの家との間に長い戦いがありました。

多くの困難な政権樹立のための争いの後、ついにダビデは勝利し、統合されたイスラエルの王となりました。

イスラエルの家は安定し、ダビデの地位が不動のものとなった時、ダビデはヨナタンを覚えていました。

3

サムエル記下第9章1節から13節を読みます。

- 1 ダビデは言った、「サウルの家のものでまだ残っている者がいるか？ わたしはヨナタンのために、その者に慈しみを示したい」。
- 2 サウルの家の中に一人のしもべがいて、その名はヂバであった。人々は彼をダビデの所に呼び寄せた。王は彼に言った、「あなたがヂバか？」。彼は、「あなたのしもべです」と言った。
- 3 王は言った、「サウルの家のもので、まだだれがいるか？ わたしはその者に神の慈しみを示したい」。ヂバは王に言った、「ヨナタンの子がまだおります。彼は両足が不自由です」。

- 4 王は彼に言った、「彼はどこにいるのか?」。チバは王に言った、「今、彼はロ・デバルのアンミエルの子マキルの家におります」。
- 5 ダビデ王は人を遣わして、アンミエルの子マキルの家から、すなわちロ・デバルから彼を連れて来させた。
- 6 サウルの子、ヨナタンの子メピボセテはダビデの所に来て、ひれ伏して敬意を表した。ダビデは、「メピボセテよ」と言った。彼は、「あなたのしもべはここにおります」と言った。
- 7 ダビデは彼に言った、「恐れることはない。わたしは必ずあなたの父ヨナタンのために、あなたに慈しみを示す。あなたの父祖サウルの地をすべてあなたに返そう。あなたはいつも、わたしの食卓で食事をするように」。
- 8 彼は敬意を表して言った、「あなたのしもべが何であるので、あなたはわたしのような死んだ犬を顧みられるのですか?」。
- 9 王はサウルの従者、チバを呼んで彼に言った、「サウルと彼の全家に属する物をすべて、わたしはあなたの主人の子に与える」。
- 10 あなたと、あなたの子たちと、あなたのしもべたちは彼のために地を耕し、あなたは、あなたの主人の子が食べる食物を取り入れなければならない。あなたの主人の子、メピボセテはいつも、わたしの食卓で食事をするようになる」。チバには十五人の子と二十人のしもべがいた。
- 11 チバは王に言った、「王なるわが主がしもべに命じられたとおりに、すべてあなたのしもべは行ないます」。ダビデは言った、「メピボセテは王の子たちの一人のように、わたしの食卓で食事することになる」。
- 12 メピボセテには小さな息子がいて、その名はミカであった。チバの家に住む者はみなメピボセテのしもべとなった。
- 13 メピボセテはエルサレムに住んだ。彼が常に王の食卓で食事をしたからである。彼は両足とも不自由であった。

4

メピボセテの祖父、サウル王がダビデの敵であったことを特に注意してください。

彼は何度もダビデを迫害し、ダビデを殺そうとしました。

サウルとヨナタンが殺されたとき、メピボセテの乳母は彼を抱いて急いで逃げました。

祖父と父親が死んだので、早く逃げないとダビデが報復しにやってきて、メピボセテを殺すであろうと彼女は考えたのです。彼女はあまりに早く走ったので、その子供は地に落ちて足が不自由になりました。

これは神の前での罪人の光景のようでないでしょうか。

人は神を誤解していました。

人は神について曲がった考えを持っているので、神は自分について曲がった考えを持っていると思うのです。

人は自分が罪を犯したことを知っているのに、神は自分を裁くと思っています。

メピボセテは思ったことでしょう、「わたしの祖父はダビデの敵だった。だからダビデはわたしを憎んでいるに違いない」。

わたしたちもこのように考えます。わたしたちは神に対して好感を持っていないので、神は自分を愛していないと思ひ込むのです。

5

ダビデは言った、「サウルの家の者でまだ残っている者がいるか？ わたしはヨナタンのために、その者に慈しみを示したい」。(9:1)

神も尋ねておられます。「アダムの子孫でまだ残っている者がいるか？ わたしは彼に親切を示したい」。

ダビデはヨナタンのためにメピボセテに親切を示しました。

神は御子イエスのゆえに、罪人に恵みを与えられました。

人は大きな誤解をして、神は罪人を憎んでおられると思っています。

わたしたちは多くの善を行なわなければならない、そうして初めて神は顔を自分に向けられると思っています。

ところが、聖書は、神は理由なしにわたしたちを愛しておられると言っています。

6

王は彼に言った、「彼はどこにいるのか？」。ヂバは王に言った、「今、彼はロ・デバルのアンミエルの子マキルの家におります」。(9:4)

「ロ・デバル」はヘブル語で「草のない場所」を意味します。今日の世界は「ロ・デバル」です。そこは決して人の飢えを満たし、人の渇きを癒やすことはできません。

「ロ・デバル」は決してわたしたちの心を満たすことはできません。

この世は次から次へとあなたを夢の中に置きます。しかし、すべてはかげろう、草のない場所にすぎません。

7

ダビデ王は人を遣わして、……ロ・デバルから彼を連れて来させた。(9:5)

もしメピボセテがダビデを捜さなければならなかったなら、彼には捜す大胆さはなかったでしょう。彼にはダビデを捜す力もありませんでした。

なぜなら、彼は足が不自由であったからです。メピボセテがダビデを捜したのではなく、ダビデが人を遣わしてメピボセテを連れて来させたのです。

わたしたちは神を求めないのですが、神は彼の御子を遣わしてわたしたちを捜し、神に連れ戻します。

メピボセテは努力する必要はありませんでした。王が人を遣わして彼を召したのです。

ダビデは、「メピボセテよ」と言った。彼は、「あなたのしもべはここにおります」と言った。

(9:6)

ここに美しい絵があります。ダビデはメピボセテを見たとき、それ以上何も言いませんでした。

ダビデが「メピボセテよ」と言ったとき、彼の心の感覚はどうであったのでしょうか。

この言葉の奥には鼓動する心があり、その心は神の心を表明していました。

「メピボセテよ」は、神が人を憎んでいないこと、神が人を欲していることを表明しています。

しかし、メピボセテはダビデの心がすぐにはわからず、まだ恐れに満ちていました。

彼は、「しもべはここにおります」と言い、しもべであると表明して王に逆らわない姿勢を示しました。

そうすれば、ダビデは自分を殺さないだろうと思ったのです。

8

ダビデは彼に言った、「恐れることはない。わたしは必ずあなたの父ヨナタンのために、あなたに慈しみを示す。あなたの父祖サウルの地をすべてあなたに返そう。あなたはいつも、わたしの食卓で食事をするように」。(9:7)

ダビデは神の心を言い表しました。

今や、すべては用意されています。

神はわたしたちの罪のために、イエス・キリストを十字架につけることで、わたしたちを義とされました。

またわたしたちが、食卓でいつも神と共に食事をするように、キリストをわたしたちの食物としました。

すべて用意されました。今や、この世に罪はただ一つしかありません。

その一つの罪は、神の提供を無視することだけです。

9

彼は敬意を表して言った、「あなたのしもべが何であるので、あなたはわたしのような死んだ犬を顧みられるのですか?」。(9:8)

ある人は言うかも知れませんが、「話がうま過ぎる、きれい事過ぎる。神の救いを得るためには悔い改めのしるしを見せなければならないのではないか?」と。

いいえ、罪を犯すのをやめてから信じるのではなく、信じてから罪を犯さなくなるのです。

メピボセテを見てみましょう。

彼はダビデに恵み深く扱ってもらった後、自分自身を知り始めて言いました、

「あなたのしもべが何であるので、あなたはわたしのような死んだ犬を見られるのですか?」。

ダビデが自分を愛しているとメピボセテが知る前に、ダビデは彼を愛していました。

メピボセテがダビデの愛を知った後も、ダビデは彼を愛していました。

メピボセテは早く「ロ・デバル」に帰りたかったのですが、ダビデの愛を知った後は悔い改めました。

神はいつでもわたしたちを愛しています。

10

メピボセテはエルサレムに住んだ。彼が常に王の食卓で食事をしたからである。彼は両足とも不自由であった。(9:13)

悔い改めた後でも、人は言うかも知れませんが、「やっぱり、救われた後、行ないが良くならなければ神は良い顔をしないのではないか?」

いいえ、王はメピボセテの足が不自由だから、少しも良くなれないから、食事を出すのをやめると考えることはありません。

わたしたちの両足は不自由ですが、それは食卓の下にあります。ただ食べるべきです。

わたしたちはただ食卓の上にあるものだけに注意すべきです。

わたしたちは自分を見るのではなく、神が与えてくださる豊富を見るべきです。

自己内省はわたしたちのすることではありません。

もし自分を見つめるなら、わたしたちは両足が不自由なメピボセテのようであるに過ぎません。

イエスを見続け、神の豊富を楽しんでいるとき、不自由な足は食卓の下です。

そうすればわたしたちの心は満足します。

11

さて、何年か後、ダビデの家がイスラエルを治めることで安泰となったとき、ダビデは心にすきが
でき、重大な姦淫と殺人の罪を犯しました。

このことの後、神はダビデを赦しますが、ダビデの王国を揺るがす事件が起こることを通して、ダ
ビデに統治上の懲らしめを与えました。

すなわち、ダビデの自分の子アブサロムが父ダビデに向かって反乱を起こし、ダビデの命をねらい
ました。

ダビデは再び逃亡生活の身となりました。

その時、ヨナタンの子、メピボセテに仕えていたチバがダビデに馳せ参じ、欺きの言葉をダビデに
語りました。

サムエル記下第 16 章 1 節から 4 節を読んでみましょう、

- 1 ダビデが山の頂を少し過ぎたとき、メピボセテの若者チバが彼を迎えた。彼は鞍を置いた一對のろ
ばに、パン二百個と干しぶどう百ふさと夏の果物百個とぶどう酒一袋を載せていた。
- 2 王はチバに言った、「なぜこれらの物を持っているのか?」。チバは言った、「ろばは王の家族が乗
るため、パンと夏の果物は若者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです」。
- 3 王は言った、「あなたの主人の子はどこにいるのか?」。チバは王に言った、「彼は今エルサレムに住
んでいます。彼は、『今日イスラエルの家は、わたしの父の王国をわたしに返す』と言ったからです」。
- 4 王はチバに言った、「見よ、メピボセテに属するのものはみな、あなたのものだ」。チバは言った、
「わたしはあなたにひれ伏します。わが主、王よ、わたしがあなたの目に好意を得ますように」。

12

ダビデ王が苦しい逃亡生活を送っている時に、彼の子アブサロムはダビデの部下たちと鉢合わせを
しました。馬に乗っていた彼は誤って首を木の間に挟み、そこをダビデの戦隊の長ヨアブが彼を槍
で刺し、彼は死にました。

ダビデは自分の過ちから出た戦いの中で子を失い、悲しみ、嘆きの歌を作って泣きました。

その後、再びダビデのイスラエル支配に安定が戻った時、ダビデはメピボセテと再会します。

このことがサムエル記下第 19 章に書かれています。

- 24 サウルの子メピボセテが下って来て王を迎えた。彼は王が去った日から平安の中で帰って来る日
まで、自分の足を顧みず、髭をそらず、着物を洗わなかった。
- 25 彼がエルサレムから来て王を迎えたとき、王は彼に言った、「メピボセテよ、あなたはなぜわたしと
共に来なかったのか?」。
- 26 彼は言った、「わが主、王よ、わたしのしもべがわたしを欺いたのです。あなたのしもべは、『わたし
自らろばに鞍を付け、それに乗って王と共に行こう』と言ったのです。あなたのしもべは足が不自
由だからです」。
- 27 チバはあなたのしもべを、わが主、王の前に中傷しました。しかし、わが主、王は神の御使いのよう
です。ですから、あなたの目に良いことをしてください」。
- 28 わたしの父の全家は、わが主、王の前では死に値する者であったのですが、あなたはこのしもべを、
あなたの食卓で食事する者のうちに置かれました。この上わたしに、重ねて王に訴える何の権利が
あるでしょうか?」。

- 29 王は彼に言った、「なぜなおも自分の事を語るのか？ わたしは言う、あなたとヂバはその地を分けなければならない」。
- 30 メピボセテは王に言った、「わが主、王が、平安の中で家に着かれたのですから、彼にそれをみな取らせてください」。

13

ダビデがエルサレムに戻った時、サウルの孫メピボセテも下って来て王に会いました。王が去った日から平安のうちに帰ってくるまで、メピボセテは三つのことをしませんでした。自分の足を顧みず、ひげを剃らず、着物を洗いませんでした。

これはどんな心でしょう！

ダビデがいない、王がいない、それで彼はいっさいのものに対して心をなくしました。

メピボセテのしもベヂバはダビデに偽りを言いました。

そのことに対する怒りよりも、メピボセテの心は「ダビデがいない！」でした。

彼の心は愛する人を失ったやもめのようなようでした。

ダビデと共に食事をした家はあわれみと慈しみと感謝に満ちた場所でした。

しかし、その家はダビデがいなくなった時、草のない場所、「ロ・デバル」となりました。

ダビデのいた家は何も変わっていません、しかし、愛する人がいないその場所は荒野に見えました。

14

メピボセテがエルサレムに来て王に会った時、王 彼に尋ねました。

「メピボセテよ、あなた なぜわたしと共に来なかったのか？」。(19:25)

彼は言いました、

ヂバはあなたのしもベを、わが主、王の前に中傷しました。しかし、わが主、王は神の御使いのようです。ですから、あなたの目に良いことをしてください。

わたしの父の全家は、わが主、王の前では死に値する者であったのですが、あなたはこのしもベを、あなたの食卓で食事する者のうちに置かれました。この上わたしに、重ねて王に訴える何の権利があるのでしょうか？」。(19:27-28)

彼はヂバが持って行ってしまったパンとぶどう酒については何も言いませんでした。

彼の心は、ダビデ王が平安のうちに戻ってきたことで十分でした。

中傷されたことは、たいした事ではありませんでした。

彼が心の内にある何かを言おうとしても、表現できる言葉がなかったでしょう。

「王が戻ってきた」、「王が今ここにいる」、それが彼にとってすべてでした。

15

ダビデはメピボセテに会い、彼と少し触れあうだけですべてを了解し、事態を受け取りました。

王は彼に言った、「なぜなおも自分の事を語るのか？ わたしは言う、あなたとヂバはその地を分けなければならない」。(19:29)

ダビデはメピボセテの土地をヂバに与えていましたが、今その半分をメピボセテに戻そうとしました。

メピボセテは言いました、

メピボセテは王に言った、「わが主、王が、平安の中で家に着かれたのですから、彼にそれをみな取らせてください」。(19:30)

メピボセテに理屈を考える思いが働いていたなら、「半分ではなく全部を返してください」と言っても良かったのでした。しかし、彼はただ一つのこと、愛する方、自分にあわれみと慈しみを示してくれた方、共に食事の席を享受した方、その方が平安のうちに帰ってきた、そのことだけが心の内すべてを満たしていました。

彼は損得を超えていました。

わたしの王が何かを得られたなら、たとえわたしが何かを失うとしても何でしょう！

わたしにまだ何か与えられるものがあるかどうか、それが何でしょう！

実はダビデの処置は間違っていました。土地はジバから全部取り上げるべきでした。

ダビデは人です。聖書はダビデの間違いをそのまま記しています。

しかし、この間違いにより、メピボセテの心がどれほど純粋にダビデで満たされていたかが明らかにされました。

ダビデは間違えましたが、神は間違えることはありません。

神はわたしたちが自分の損得ではなく、神の損得だけを顧みるまでわたしたちを救いたいのです。

メピボセテがこのような心を持ったのは、日ごとに偽りのないダビデの慈しみを楽しんだからです。

16

イスラエルの歴史を中心に書かれた旧約聖書は、来るべきキリストがどのような方かを登場人物や出来事を通してあらかじめ示していました。

そして、神はイエスという一人の人の中で来て、実際にわたしたちを導き、養い、神に連れ戻すために働いておられます。

聖書が証しする言葉を聞いてください。

今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。その方こそ、主なるキリストである。（ルカによる福音書 2 章 11 節）

神はイエスという、わたしたちと同じ人となり、わたしたちと共に生活し、わたしたちの苦しみを知りました。

17

マタイによる福音書 9 章 36 節の言葉です、

そして彼は群衆を見て、彼らに深く同情された。なぜなら、彼らは牧者のいない羊のように、苦しめられ、捨てられていたからである。

彼は多くの人々に同情を示されました。

ルカによる福音書 23 章 33 節は言います、

彼らが「どくろ」と呼ばれる場所に来た時、そこで人々はイエスを十字架につけ、犯罪者たちも、一人を右に、一人を左につけた。

彼は、罪人がどうしても犯してしまう罪に対して、それを裁くのではなく、神の裁きをご自分が負うために十字架につかれました。

18

ローマ人への手紙 4 章 25 節は言います、

イエスはわたしたちの違犯のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられました。彼の身代わりの死は神に受け入れられて、その証拠に彼は復活させられました。

コリント人への第一の手紙 15 章 45 節の言葉です、

そこで、「最初の人、アダムは、生きた魂と成った」と書かれています。最後のアダムは、命を与える霊と成ったのです。

彼は天に上げられ、神の御座につき、またわたしたちのところに命を与える霊として来ておられます。

また、ローマ人への手紙 10 章 8 節は言っています、

それでは何と言っていますか？「言葉はあなたに近い。あなたの口の中に、またあなたの心の中にある」。これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉です。

主は今日、霊であり、神の言葉であり、わたしたちを愛し、押し迫っています。

19

わたしたちが呼ぶ方、主イエスは、敵であった者の子孫のようなわたしたち、神の道を少しも歩けないメピボセテのように足の不自由なわたしたちを食卓に着かせてくださいます。

神は愛をもって、あわれみをもって、慈しみ、親切をもってわたしたちを顧みてくださいます。

愛してくださる方を愛し、受け入れましょう。

神と人なる主イエスとの交わりの食卓に着きましょう。

最後にローマ人への手紙 10 章 12 節の言葉を聞いてください、

ユダヤ人とギリシャ人の区別はありません。同じ主が、すべての者の主であって、彼を呼び求めるすべての者に、彼は豊かです。

わたしたちが彼を呼び求めるなら、彼はわたしたちの中に入り、彼ご自身を供給してくださいます。

1

737 (英 1068)

つみにくるしむわれをさがし、か

れはやさしくかたに乗せて、ひ

つじのむれへと、われをかえされる。

(復)こよなきあい! あがないの死! 満ちあふ

るめぐみよ! むれへとかえされる!

- 2 きず負うわれに あぶらを塗り、
かれはささやく: 「なれ、わがもの!」
このあまきこえに、 ころろはよろこぶ。
- 3 くぎあとしめし、 血はながれる、
いばらのかんむり、 こうべに受く;
主の受けた苦つう、 はかり知れぬもの。

2

(曲) 603 (英 837)

聖書のれきしおしえるひとのころろひらいて

かみのねがいつたえてれいのなかかがやく

- 2 きずなむすぶヨナタン ダビデまもるけいやく
かみのことば変わらず いのち得るあわれみ
- 3 ダビデふかく主あいし かみの慈あいあらわす
メピボセテのころろも かみのあいあふれる
- 4 あしにのこる不自ゆう 見せぬあいのしょくたく
食べて受けるかいほう とともに住むまじわり
- 5 主よあなたに行きます つみゆるした十字架に
御名を呼んで享受する 慈あい満つあわれみ